

本号で本紙を休刊します ホームページは継続

会長 上谷 勝己



第100号

発行

宿場町枚方を考える会

会長 上谷 勝己

枚方市船橋本町 2-87-7

072-857-2995

編集 広報委員会

主な内容

- 本号で本紙を休刊します (1頁)
- 日野の歴史に触れる (2頁〜5頁)
- 黄檗山 萬福寺に参拝 (6頁〜7頁)
- 犬田城の攻防 (8頁〜12頁)

本紙は、本会発足3年後の昭和63年(1988年)1月10日に創刊されました。

平成26年3月23日発行の第79号からは紙面のカラー化を図りました。始めて出品

昭和63年1月10日



新春を寿ぎ

会誌の発行によせて

会長 大塚 日出男

新年おめでとうございます。宿場町枚方の街道筋のほぼ中間、三矢町浄金寺で、当会が結成されて間もなく満三年を迎えようとしています。

たのではないでしょうか。まるで絵巻を見るように過去が思い出されるのは、確しの中身に加えて、きのうまで知らなかった会員同志の心の

創刊号1頁
(部分)

発行
宿場町枚方を考える会
発行責任者
大塚 日出男
事務所
枚方市甲斐田町18-26
中島 かずよし
☎ 0720-49-0950

主な内容

した令和6年度の枚方市機関誌コンクールでは、PTA・サークル部門で優秀賞を受賞しております。

誠に残念ですが、すでに前号でお知らせしましたように諸般の事情により、本号(100号)をもちまして休刊させていただきます。

ご愛読いただきました皆様、原稿にご協力いただきました皆様、そして配布などに携わって下さった皆様に心からお礼申し上げます。なお、本会の情報発信としてのホームページは継続していきます。

湖東の町

日野の歴史に触れる

三栗 石川 勲

バスを利用した令和6年度の見学会は、令和7年3月13日に滋賀県日野町を訪ねました。参加者34人が最初の一步を記したのは日野川ダム駐車場（以下「駐車場」）です。日野観光ボランティアガイドさんの出迎えを受けました。

日野町

日野町は滋賀県の南東、鈴

鹿山系の西側にあり、面積117km²、人口2万人の緑豊かな町です。



中心部は、蒲生（がもう）氏が日野城の城下町として開

発し、伊勢松坂へ移ってから、漆器や製菓、日野商人（日野出身の近江商人）の発祥地として繁栄してきました。

日野城（中野城）

最初に案内されたのは、「日野城跡」です。藤原北家の藤原秀郷を祖とする蒲生一族、蒲生定秀（さだひで）が天文2年（1533年）から3年

をかけて築城しました。主郭は一辺約100m、周囲を高い土塁と堀で囲まれていたと言われています。

慶長5年（1600年）の関ヶ原の戦い以降は廃城となりました。なお、地元では地域名から「中野城」と呼んでいます。



駐車場の約70m手前にある石碑。背面に「従是西十步大手門跡也以其石建立 昭和四十一年夏」と記されている。

昭和40年の日野川ダム建設工事に伴い、遺構の大部分

は取り壊されましたが、一部に石垣や堀が残っています。



蒲生氏郷

蒲生氏郷（うじさと）について、町のホームページは「蒲生一族の中で、今も日野の人々の心の中に生きているのが蒲生氏郷公であります。産業政策にも秀でており、日野の人々は、いまなお慕い続

けています（要約）」と評しています。

氏郷は、日野城を築城した蒲生定秀の孫として弘治2年（1556年）、日野城で誕生しました。

産湯の井戸

駐車場入口の手前、本丸跡とされる場所に「蒲生氏郷公産湯の井戸」があります。復元整備されたものですが、詳細は聞き漏らしました。



永禄11年（1568年）、織田信長の人質として岐阜城に入りますが、彼の器量を見抜いた信長に寵愛され、翌年には信長の次女冬姫（異説あり）を正室とし、日野に帰国しました。



駐車場内の説明板（令和3年設置）に掲載されている氏郷と冬姫の肖像画

本能寺の変のあと、秀吉に従います。多くの武功により秀吉からも重用され、天正12

年（1584年）、日野6万石から伊勢松坂12万石に、最終的には会津92万石を拝領しています。

武人であつた氏郷は、千利休の高弟で、一流の茶人でもありました。利休が秀吉の命により切腹させられたとき、娘婿の少庵をかくまつたと言われています。その氏郷が日野城主時代、茶の湯に使つたとの伝承のある井戸「若草清



また高山右近らと親交があり、彼の勧めにより天正13年

(1585年)に洗礼を受けたキリシタン大名(洗礼名レオン)でした。

うまおかわたむき

馬見岡綿向神社

欽明天皇6年(545年)、日野町の最高峰である綿向山(1110m)の頂上に祠を建てたのが始まりとされ、延暦15年(796年)に現在の地に移転されたと言われています。本殿は県の指定文化財に指定されています。



本殿

中世の後期、この地に城下町を築いた蒲生家が氏神として庇護してきました。氏郷は、伊勢松坂、会津に移つても寄進を続けていました。

江戸時代になると、日野商人の出世開運の神として崇拜されてきました。境内には日野商人が寄進した拝殿、石灯籠、石橋があります。

とりわけ境内で目を引くのが、本殿の横にある大猪の石像です。



大昔、綿向山で狩りをしていた人が猪の足跡を辿ってい

くと、白髪の老人と出会い、宣託を受けて祠を建てたのが神社創建の契機となったのです。ここでは、猪は神の使いであり、シンボルなのです。神社に詣でると、まず手水舎で手や口を清めます。この神水の出口、龍の口が多いのですが、ここでは猪の口から出てきます。



近江日野商人ふるさと館

正式には近江日野商人ふるさと館「旧山中正吉邸」と言います。現在の静岡県富士宮

市で酒造業を営んでいた山中正吉の本宅です。



入口



外観

江戸時代末期に建てられ、敷地面積は2000㎡あります。

す。増改築を繰り返して、昭和13年頃に現在の形になりました。作庭された庭園も見事です。



近年、空き家となつていましたが、購入した所有者により平成20年に一般公開されました。その後、町が土地を購入、建物は寄進を受け、平成27年4月1日から近江日野商人ふるさと館「旧山中正吉邸」として公開され、体験、交流、古文書類の保管展示場

所となっています。

ここでは、地産地消、手作りにこだわった日野の伝統料理がいただけます。昼食として「鯛そうめん御膳」をご馳走になりました。参加者の皆さんは、「美味しい」の連発でした。



午後もガイドさんの案内により近江日野商人関連の施設を巡り、日野の歴史に触れてきました。



参加者全員で記念撮影（馬見岡綿向神社）

近郊の史跡を歩く会

黄檗山 萬福寺に参拝

萬福寺は、隠元隆琦（いんげんりゅうき）により寛文元

萬福寺



春の「近郊の史跡を歩く会」は令和7年5月18日、宇治市にある黄檗宗総本山「萬福寺」に参拝しました。上谷会長以下30人が萬福寺の正門「総門」前に集合、宇治観光ボランティアガイドさん3人から自己紹介と案内の手順について説明を受けました。

隠元隆琦

隠元は、中国明時代の高僧です。日本からの度重なる要請を受け、63歳だった承応3年（1654年）、弟子20余人を伴い来日しました。当初は3年で帰国する予定でした。本国から再々の帰国要請もあり、帰国を決意しますが、日本側の強い引き留めを受けず。明末期の混乱もあり、帰国を断念、日本で天寿を全うしました。隠元を祀

年（1661年）に創建されました。日本三禪宗（他に臨済宗・曹洞宗）の一つ、黄檗宗の大本山で、黄檗山はその山号です。寺名は、隠元が「旧を忘れない」と言う意味を込め、かつて住職を務めていた福建省の黄檗山萬福寺と同名にしたものです。

萬福寺と徳川家



る開山堂の奥、寿塔に葬られています。

萬福寺の敷地は13万㎡、隠元に帰依した第四代将軍徳川家綱から与えられた寺領が下地となっています。隠元は万治元年（1658年）、家綱に拝謁しており、萬福寺では家綱の命日にあたる5月8日に厳有忌を行っています。また、境内の奥にある

威徳殿には歴代將軍の位牌が安置されています。

萬福寺の宗紋は徳川家の家紋である三つ葉葵、徳川家との縁から使用が許されたと言われています。ただし、陰紋（かげもん）のため輪郭線だけで描かれています。



総門白幕に描かれた宗紋

伽藍配置

伽藍は、西側を正面とし、左右対称に整然と配置されています。文化財としては、国宝3棟、重要文化財23棟があります。これらの建造物は、

日本の一般的な寺院建築とは異なり、隠元が来日した中国の明時代末期の様式で建てられています。

建築材も東南アジア原産のチーク材を使用しています。デザインも、「卍字くずし」の勾欄、「黄髮天井」と呼ばれるアーチ形の天井など、日本の寺院では見かけない技法が多用されています。



「卍字くずし」の勾欄（法堂／国宝）

大雄寶殿

萬福寺の本堂は、寛文8年（1668年）に建立された

大雄寶殿（だいおうほうでん）です。伽藍の中でも最大で、シヤム（現在のタイ）産のチーク材を使用した歴史的建造物で、令和6年12月に国宝に指定されました。堂内には本尊、釈迦如来坐像が阿難陀（あなんだ）と魔訶迦葉（まかかしょう）の二体を脇侍として安置されています。



釈迦如来坐像

私たちが訪れたのは日曜日、有名寺院だけあって多数の参拝者がおられ、着物姿の女性

も多く見かけました。後で気付いたのですが、この日は全国煎茶道大会が開かれていたのです。5月に行われる萬福寺の年中行事の一つです。

会場は大雄寶殿前の月台（げつたい）、見物する方が多かったのですが、献茶式を拝見することができました。なお、11月1日（土）には月見の煎茶会が開かれました。



献茶式

戦国時代、交野ヶ原

「犬田城」の攻防

交野市天野が原町 堀家 啓男

「犬田城」の攻防

戦国時代、交野ヶ原で大戦（いくさ）があつたのをご存知ですか。牧郷の南、村野・犬田（いんだ）であつた「犬田城」の攻防戦です。これは「応仁の乱（1467～77年）」が終わった後も続いた名門守護大名、畠山家の家督を巡る争いの一つでした。

畠山家の家督争い

畠山持国（もちくに／足利家の一族、室町幕府管領 守護大名 1398～1455年）には嫡男がなかったため、六代將軍義教の圧力を受けて弟の持永（もちなが）に家督を譲ります。義教が暗殺されると、持永を倒して再び管領になります。弟、持富（もちとみ）を養嗣子として後継者としますが、その後、別の女性との間に義就（よしひろ、又はよしなり 1437～1491年）が生まれたため、

応仁の乱

播磨など数力国の守護で、幕府で実権をふるおうと画策していた有力守護大名、山名

翻意、実子義就に家督を継がせることにし（1450年）、幕府も承認します。
ところが畠山家の家臣の多くは、家督を譲られる予定であつた持富側に付きます。この立場は持富の遺児、弥三郎に継承され、弥三郎死亡のため、その弟政長（まさなが／持富の二男 1442～1493年）に引き継がれました。義就と政長は、従兄弟（いとこ）の関係になります。政長は八代將軍義政や細川勝元の支援を得たため、義就を圧倒し、幕府の管領に就任します。

宗全が、畠山家の家督争いに目をつけ、義就に近づきます。

義就はこの誘いを受け文正元年(1466年)12月、上洛し、宗全方に付き、室町將軍御所を包囲しました。そして、翌2年1月18日(その年の2月に改元、応仁元年1467年)御霊社に陣を置いていた東軍(將軍義政、細川勝元ら)政長方を攻撃、1日の戦いで圧勝します。応仁の乱の発端となる「上御霊社」の戦いでした。

將軍、管領、有力守護らの覇権争い、家督争いなど、東軍(將軍義政、細川勝元、畠山政長ら)と、西軍(山名宗全、畠山義就ら)に分れて戦線は拡大、泥沼化します。西軍側に立った義就は畠山家家督の座を東軍に付いた政長に奪われます。

応仁、文明にかけての大乱

は、將軍後継者に指名された足利義視(よしみ)が將軍義政と対立し、東軍から西軍に移るなど、どちらが正当なのか大義がはつきりせず、義就、政長の家督争いも決着がつかぬまま、延々11年、京都の街を焼き尽くしたのです。長い戦いに飽きる者も出て、応仁の乱は東軍有利の状況で終結しようとしていました。

義就軍、牧に集結

西軍の一員、畠山義就は文明11年(1477年)9月、突如京都の陣を離れて河内に向かいます。このままでは家督争いに不利になると考え、畠山家の本拠地である河内を実効支配しようとしたのです。淀川を渡り楠葉を経由、「牧(牧野)」に集結した義就軍は、

東高野街道を南下し野崎(大東市)に進みます。義就は、畠山政長方の重臣、守護代遊佐長直が守る河内、若江城(東大阪市)を狙います。

義就、河内一國 ほぼ平定

義就は武力に優れ、河内周辺の武士は義就軍に駆け付けました。9月27日、若江城の政長方の遊佐長直が迎え撃ちますが、義就は一旦退却すると見せかけ、客坊城(東大阪)などを陥落させ、10月3日には八尾城(八尾市)に入り、若江城と菅田城(羽曳野市)を孤立させることに成功します。

7日、菅田城を攻め、和田美作守以下37名を討ち取り、その首を京都にいる政長に送

り、決戦を呼びかけました。10月9日、ついに若江城から遊佐長直が逃げ出し、政長方の敗北となります。

この間わずか1カ月、義就は、河内一國をほぼ平定します。この勝利を義就の「河内王国の誕生」、「幕府威令の届かぬ独立国」と評する人がいます。

義就は、戦国の世に真っ先に関の声をあげ、いち早く河内一國の平定をめざした戦国大名と言えます。

義就、犬田城奪還

文明14年(1482年)3月、東軍側にあって幕府管領となっていた畠山政長は、義就が実効支配している河内奪回を目指し、摂津、和泉、河内に転戦します。義就の河内

支配を容認できなかったのです。

政長は北河内で唯一の拠点であった茨田郡の「十七箇所」(現在の門真、守口、鶴見区など、淀川下流で、本流との間にあった低地の元莊園群のこと)の守りを固め、さらに、その北方、牧(交野ヶ原)の南端、村野の枝郷 犬田(注)にあった「犬田城」を占拠し、家来の野尻某に守らせていました。

(注) 旧市史によれば昭和13年、川越村が枚方町に合併されると同時に犬田区となりました。

これに対し、義就は同15年(1483)8月、淀川の堤や、淀川に合流する大和川の堤を各所で切り落とし、水攻めで低地にある「十七箇所」

を攻めたて孤立させます。後の秀吉の水攻め策を先取りしたようでした。

ついで義就は政長方となっていた交野ヶ原の「犬田城」を落とすため、四千の兵で城を取り囲みます。

政長方も甲冑武士70人を合めおよそ150人で犬田城の守りを固め、さらに遊佐長直率いる越中の国人椎名氏らを加えた3000人の軍勢を淀川越えで楠葉に集結させ、「犬田城」への援軍とします。

義就勢を後方から挟み撃ちにしようとしたのです。両軍合わせて数千の大軍勢です。

9月9日には中宮の小谷を挟んで両軍が対峙します。同17日、ついに激突、歴戦のつわもの義就方が圧倒し勝利、楠葉にあった政長方は大敗、椎名は討ち死に、長直は逃げ途中、楠葉で川に落ちて行

方不明となります。

それでも政長方の犬田城はなお粘り、侍100人、総勢300人ばかりが籠城しました。しかし、奮戦むなしく9月26日、落城に至りました。城を預かっていた野尻某は切腹しています。この勝利で義就は「十七箇所」及び一帯を回復しました。

文献に残る犬田城

犬田城は、「近畿の城郭I」(中京大学教授馬部隆弘著)では、京阪交野線・村野駅の東にある丘陵(旧市史では「作座山」という小字名が残っており、現在は「村野本町」の一部)にあったとされています。馬部氏の研究では地形的にこの丘陵が想定できるそうです。

村野駅から徒歩で約2〜3分、台地状の住宅の間の細い道に入って急な坂を上ると尾根筋に道があり、両側に住宅が建ち並び、この一帯が「犬田城」跡のようです。高低差10メートルばかりの崖が取り巻き、城があったことを想像させます。



犬田城跡の住宅街に
上る坂道(村野本町)

あたりは古くから民家が建ち並び、歴史ある落ち着いた住宅街で、一角に近世の高札

場（市指定文化財／左写真が残る旧家もあります。



切り立った丘陵の北側は低地で、かつては田が広がり城を守る大きな堀のような役割を果たしたのでしょうか、現在には開発されて住宅地となり、その住居表示名は印田町（いんだちょう）となっています。尾根筋の東は谷が横切り「堀切」を形成していますが、ここも新しい住宅が建ち並ん

でいます。

交野線の向こう側、丘陵の西にあたる広大な田園地帯（近く土地区画整理事業が行われるようです）の端に天野川が流れ、城の防御を万全にしています。

一方、丘陵の東に出ると1kmばかりで河内、京都を結ぶ旧東高野街道が横切り、この付近が堺、京都方面に至る古くからの交通の要衝であったことが分かります。

交野・郡津に至る
旧東高野街道の一部



畠山家の家督争い その後

「犬田城」の攻防戦は家督争いとともに、戦略的には交通の要衝の確保を目指す戦国大名同士の戦いでもあったのです。

犬田城攻防戦後、畠山山の山城国への軍事進出が行われます。しかし、やはり結着がつかず、戦いは続き、これに耐えかねた山城国人の国一揆が起こり（1485年）、将軍義政は両軍に撤兵を要求します。義就がこれに協力し、その功績で将軍家によって義就は赦免（1486年）されます。

しかし、延徳2年（1490年）12月、豪勇義就は病没します。時に恵まれれば、知

勇兼備の戦国大名として、天下を争う人物であったと想像できます。

義就の後継（尾州系畠山という）は嫡男の基家（もといえ／改名して義豊）が継ぐことになりました。一方、明応の政変（1493年）で敵方の畠山政長（総州系畠山という）が自害します。政長の跡をその子、尚順（ひさのぶ）が継ぎます。

畠山山を継いだ義豊と尚順が再び家督を争い、「十七ヶ所」で戦い、義豊が戦死（1499年）し、その子義英が尾州系を継承します。

文亀4年（1504年）、京都で土一揆が起こり、徳政令が出された年の12月、ようやく尚順と義英の和睦が成立しますが、その後もその後裔が家督争いを続けます。

義就系（尾州系）は義英の

あと、義堯、在氏、尚誠（ひさまさ）まで続きますが、残念ながら近世を待たず尚誠（ひさまさ）以降は消息不明となります。

政長系（総州系）は尚順（ひさのぶ）以降も、数代を重ね高政、貞政（1557～1641年）と続き、近世直前まで命脈を保ちます。高政は、私部城（交野城）の安見宗房を押さえられなかったようです。それでも貞政の子、政信（1591～1675年）の時、徳川三代將軍家光（1604～51年）によって名家の出身として300石の旗本に登用されます。

その子である基玄（もとほ）る 1636～1710年）は、奥高家（1679年）となり、五代將軍綱吉の信任を得て度々加増、側用人にまで取り立てられ、五千石の高家

大身旗本になります。明治時代に至り足利家に家名を戻します。

津田や私部の領主であった畠山家は高家旗本（3120石）ですが、交野市役所に聞くと、早くに分家した能登畠山家の後裔にあたるそうです。但し、途中で総州系の義福（よしとも）が養子で入り、明治に至ります。こちらは畠山家の家名を続けました。

いずれも徳川家の高家旗本でしたが、戦国時代の家督争いで消耗したためか、畠山家は近世大名にはなっていないようです。

参考

「応仁の乱」呉座勇一著
「近畿の城郭」馬部隆弘著、「郷土枚方の歴史」
「枚方市史第2巻」枚方市

会員募集中

本会は、講演会や観光バスを利用した日帰り見学会を実施しています。会費は3600円（一年度）です。入会をお待ちしています。ご希望の方はホームページをご覧ください。

新会員紹介

大熊 正浩さん 翠香園町
青木 勇さん 山之上
中田ふみよさん 東中振
野嶋 俊文さん 印田町
（令和7年9月30日現在）

ホームページを開設しています

本会をご理解、ご賛同をいただくため、事業内容、入会案内などを掲載しています。
HP <https://syukubamachi-hirakata.com>

宿場町枚方を考える会



検索してね！

